

約束の季節

阿部初枝



約束の季節

阿部初枝

日本看護協会出版会

阿部 初枝（あべ はつえ）

1937年埼玉県立川越高等女学校卒。'40年日本赤十字社大連病院看護婦養成所卒後召集令により天津陸軍病院に派遣される。'47年内地に引揚げ、'63年より老人看護に取り組む。'75年9月寝たきり老人看護についての随筆『華胥の夢』（栄光出版社）出版。'78年3月『春く刻』（日本看護協会出版会）出版。'76年1月上毛文学賞（小説），11月群馬県文学賞（随筆），'78年1月上毛文学賞（小説）受賞。群馬ペンクラブ会員。文学誌「風雷」同人。

現住所：静岡県浜松市庄和町2476-1

朝霧の園

約束の季節

定価1100円

1980年6月20日 第1刷発行

1980年11月10日 第2刷発行

著者 阿部 初枝

発行所 株式会社 日本看護協会出版会

〒107 東京都港区南青山7-8-1

TEL 03(407)7969

振替東京9-168557

印刷所 株式会社 ひろせ印刷

落丁，乱丁本はお取換えいたします。

目次

目次

わが家	1
コトネちゃん	5
清きまま老いて	8
刺激	11
摂食介助始末	16
ちよつとした言葉	19
命の送別	22
介助の谷間	26
ゆがんだ生き甲斐	29
サイン	34
苦しまずに死にたい	37
ひとりごと	42

夢	45
小さな不満、小さな喜び	50
安住への遍歴	54
陽吉いちゃん	60
疎外が生むもの	64
生あるかぎり	68
うれしくてうれしくて眠れません	72
水	77
華麗なる昔を今に	82
父帰る時	86
人間最後の共通の楽しみ	89
女と食べ物	94
動ける間は働きたい	97
密かなご馳走	99
少年老い易く明日は考え難し	103
薬を信仰する人	107

目次

戸別慰問	112
末期の水	117
「養老院」という観念	121
働き過ぎと休み過ぎ	125
失語に待する	129
趣味の救い	134
習性となる	138
子供さえいれば安心か	144
最後の瞬間まで見事に生きる	148
愛と涙の使者	151
魅力ある人	154
天下泰平	156
神をいざなう時	162
お迎えが来た	167
二度赤児 にどあか は樂園	170
死に欲	177

目次

おむつはいやだ	180
ある後悔	184
幸福をさがすおさくさん	191
おわりに	207

表紙

阿部初枝

わが家

自分の家ほどくつろげる場所はない。暑ければ裸になり、ごろ寝をしよう、話したくなければ黙ってしようと気兼ねはない。家族とは、睦み合い助け合い、そして、後くされのな言い合いも出来る。わが家ほどよい所はない。

老人ホームが、老人の為に、そんな「わが家」になれるだろうか、と私は時々思う。

私の息子の友人がある時、

「お前の家は、自分の家みたいだ」

と言ったというのを、私はそのつと思ひ出す。

要するに彼の場合はお客扱いをしないのが気兼ねのない原因らしい。私のほうは、自分がくたびれてしまうから、親しい人には、よいいなサービスをしないだけだけれど……。

老人ホームはその名の通り生活の場で、それぞれの老人のマイホームである。病院のように、病気の回復までの一時的寄宿が目的ではない。

だから、死ぬまでお客様でいては、みるほうもみられるほうも疲れてやりきれなくなるだろう。

お互い気兼ねのない住み家でいるためには、老人をきゆうくつな「お客様」にしては駄目だと私は思う。早い話が、表面のきれいごとより、内面の真実な思いやりが、家族としての合格点に近いと思うのである。しかし、お互いにそこまでいくには、個々にさまざまな問題がある。

右半身が麻痺して動作のぶい金次さんは、垢だらけの赤裏の黒ジャンパーを着て入園して来たが、毎日疑わしそうな大きな目玉で周囲を睨んでかしこまっていた、

「お食事をどうぞ」

と膳を運んでも、啞みたいに黙って礼をするだけで少しもくつろいでくれなかった。

しかも、入園以来何回もなだめたりすかしたりして、

「着替えをしましょう」

と、新しい着物を着せようとするが、頑なに腕組みをしていてその手をほどこうとしなかった。

ある時、それにしてもあんまり体が汚いからと無理に入浴を勧めたら、一礼して風呂場に行き脱いだ着物をまとめると、紐で頭の上にしぼりつけ、大井川の川越えみたいになって湯につかっていた。だから、彼の入浴中にジャンパーなどを洗濯に出してしまおう、ともくろんだ私達の計画は見事失敗だった。金次さんは、あっという間に元の姿に戻り、かしこまっていた。

私達は仕方ないので、あまりわいわい騒がぬことにした。そのうち慣れて、彼が私達を家族として認めてくれたら、ジャンパーを自分で脱ぐだろう、と話し合った。それまでは他人だ。

金次さんは、四月から六月末まで、大汗をかいてもジャンパーを着ていて、真白なシーツは、何回とりかえてもすぐに真黒になっていた。

ある日、金次さんのひげが大分のびたので、私が左頬を剃ってやり、何気なく、

「後の半分は自分でやってごらんなさい。やれるでしょう」

と、剃刀を彼の右手に渡したら、彼は何を思ったのか、いきなりその刃物を左手に持ちかえて振り上げ、

「右手が不自由なのに、右を剃れなんてなんだ！」と怒鳴った。

「あれ！ 本当ね、本当だわ、ごめんなさい、助けて」

私は、自分の迂闊さにおどろき、また、金次さんの頭脳がとてもしっかりしているのを知って喜び、さらにまた、はじめて私に遠慮なくものを言ってくれたのがいっそう嬉しくなった。私は、片手で頭を抱え、片手を金次さんのほうに上げ、首をすくめて、

「かんべん、御かんべん！」

と笑い出し逃げ腰になった。彼は急ににやりとした。それでも私は結局彼の顔を全部剃らなかつた。

しかしその翌朝、彼の部屋の前にはジャンパーが脱いであった。そと部屋をのぞくと、彼は新しい浴衣を着、つるりときれいな顔をして、ベッドに腰かけていた。金次さんはやっとうろぎの場に坐ることが出来たのだった。

コトネちゃん

「おはよう」

と言ったら、コトネちゃんは、

「コトネ」

と答えた。コトネちゃんというのは渾名で、脳出血のために、言葉をかたちづくる機能が、「コ」「ト」「ネ」の三つの発音だけを残して、全部失われてしまったため、彼女が、意思表示のすべてを「コトネ」だけで済ましていたのでつけられたものだ。

コトネ婆さんは寝たきりで、いつも天井をむいている。動くのは、賢そうな目と小さな皺々の口と右手だけだ。

「風邪でひどい目に逢ったわね」

「コトネー、コトネ、コトネ、コトネ——、コトネ」

最初のコトネは、語尾をぐっと上げながら伸ばし、次は早口に続け、後は、語尾を太い声で低

く下げ、その後は、きちっとしめた。

通訳すると、

「まったくねー、苦しくて、苦しくて、でも助かった——、ありがと」と言っているのだ。

彼女は、ここ十日ばかり、風邪熱で苦しんだ。

目と口と片手を総動員で、彼女は、息苦しい、汗をかいた、頭痛がする、と訴え続けた。彼女自身にとっても、医療を施す側の者も、失語した者とはいえ、残存能力によって、彼女が、ともかくにも、自分の自覚症状を他に伝えられたことは幸いであった。まったく不能な者との差は大きい。

コトネの抑揚は、真に迫り、感動的で、下手な説明よりはるかに詳しく真意を伝えた。

彼女はおしゃべりだ。三つの発音しか出来なくても、そんなことは気にしない。

「御飯は食べられるようになったのね」

「コトネー」

低く語尾をふるわせ、眉間に小さな皺を寄せた。それは、

「食べられなかったあーん」

と甘ったれているのだ。

朝食は、ちゃんときれいに平げているのを私は知っていたが、病後の甘えは、子供でも大人でも気持ちのよいものだ。誰よりも自分が注目され、大切にされる快さが、コトネちゃんをくすぐっているのである。

「おや、そうなの？ それじゃ、早く元気になって、沢山食べて、コトネのネッ！」

と、私は最後の「ネ」に力を入れ、彼女の手を持って振った。彼女は、

「コトネッ！」

と、声を詰まらせて、笑い出した。

そのコトネちゃんは、今はもうこの世にいない。が、私はコトネちゃんのことを忘れられない。

たった三種類の発声を抑揚で駆使し、いつも、自分の幸福を自分で呼んで、明るい生活を作り出したおばあちゃんだった。素晴らしい生き方である。

それに比べ、何でもしゃべれるのに、世に一言の感動ももたらすことなく、無用のおしゃべりだけで終わってしまいそうな自分が、私は恥ずかしいと思うのである。

清きまま老いて

みいばあちゃんは、どこかが他のおばあちゃん達と違う。

彼女が入園して来た時、私は尼さんが来たのかと思った。短い髪や、着て来た白い着物のせいばかりでなく、彼女の全身に匂う、どこやら幼く、しまった感じが、成熟を経て老いた女が持っている、褪せた色を感じさせなかった。

みいちゃんは、幼時に小児麻痺に侵され、寝たきりで老人になってしまったのだそう。だから、年をとるのを忘れてしまったのかもしれない。

それでも、子供の頃はどうかやら歩けたらしいのだが、年頃になった時母親が、

「若い娘がそんな姿で歩いているのはみっともないから寝ていなさい」

と、無理に蒲団に押し込み、おかげで足腰のまったく立たない人間にさせられてしまったのだという。何と愚かな母親だったのだろう。

以来、彼女の世界は、自分の横たわっている四角な部屋だけに限られ、母なきあとは、身寄り

も友もなく過ぎ、四十代の若さで特別養護老人ホームに入る身となった。

だから、みいちゃんが処女でない等と思う者は一人もいなかった。

ところがである。あの日、威勢のよいかけ声で、賑やかに冗談を言いながら、みいちゃんを抱き上げ沐浴させていた寮母達が、

「みいちゃんは処女よね」

「もったいないな」

と言ったとたん、彼女は急に泣き出した。その声が次第に大声になり、

「口惜しい。口惜しい」

と言いだしたので、まるでいじめてるみたいで、皆びっくりしてしまった。

聞けばその昔、少女のみいちゃんが独り寝ていた時、母親の留守をねらって来た村の若い男が、みいちゃんを犯して逃げ去ったのだという。

私だけは、検査のため導尿をした時、彼女が乙女のままではないらしいことを知ってはいしたが、そういう経験のためとは思っても及ばなかった。

私達は強いショックに啞然となった。世の男族が皆憎らしくなる思いだった。

それからのみいちゃんは、少しでもそんな話題に触れると、たちまち泣き出すようになってしまった。

そうってから、私は、みいちゃんの隠された悲しみに思い当たるふしを思い出した。

彼女の部屋に初めてテレビが入ってからのことだった。彼女は、それまでも明るく暮らしていたのに、急に元気がなくなり、よく目を赤くし、さめざめと泣いている姿を見せるようになった。

「どこが痛いのか？ 何かあったのか？」

と尋ねても、黙って首を振るばかりで、わけは語らなかった。

あとで考えれば、言いたくても言いようがなかったのに違いない。彼女は永い年月、限られたせまい世界しか知らず、また、それゆえにこそ、静かな臥床生活の倅せを保ち続けて来た。

しかし、テレビは非情に、外界のはなやかな複雑な人間生活の哀歓を、彼女の胸にたたきつけ、これでもか、これでもかと、その胸をえぐった。

彼女はきくと、昔の、たった一つの、この世に生きた女の証を思い出したに違いない。そして、実る術のなかった自分の人生を嘆いたに違いない。

でも、悲しいけれど、時移りよわいを重ね、彼女の心が憎悪を越えて和む日があるならば、彼女のかつての体験は、やはり、なかったよりあったほうがよかったのだと、私は思っただけだ。